

第1部 研究の概要

1 はしがき

本科研は、平成4年度から同6年度までの3ヶ年間に亘って受けた科学研究費補助金総合研究（A）『古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究』の研究成果を踏まえて、新たな課題を設定して取り組んだものである。当初は平成15年度から同18年度までの4カ年計画とし、平成15年度に基盤研究（A）『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代推定に関する基礎的研究』として採択されたが、平成17年度の秋に最終年度前年度における計画変更を申請し、平成18年度に同様の課題名で同19年度までの延長が認められた。本報告は、計画変更後の平成18年度から同19年度までの2カ年分の研究にかかる研究報告書である。

前科研総合研究（A）『古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究』においては、日本中世における古文書の料紙に関して、原料の違いから見た紙の種類でいえば、平安時代中期から戦国時代に至る中世全時代に亘って、文書料紙には楮を原料とする楮紙を主に用いていること、楮紙のうちでは、製法の違いから見た紙種でいえば、鎌倉時代までは檀紙や引合を多く使用し、南北朝時代以降は杉原紙・強杉原を主に使用していること明らかにした。雁皮を原料とする斐紙は、主として南北朝時代と戦国時代とにおいて武家発給の文書に用いられたことも指摘し、日本中世における文書料紙の変遷とその全体像を、今日に伝存している文書原本について、光学的な観察と物理的な計量、および古文献に叙述されている文書料紙に関する記事の検討をもとに、曲がりながらもおよその概観を解明することができた。

本科研は、以上のような前科研の研究成果を発展させ、文書料紙が日本中世から近世へはどのように変化するのか、文書の料紙と典籍・聖教・絵図のそれとはどのように関係しているのか、また日本の文書料紙と中国大陸・朝鮮半島のそれらとどのように相違しているのか、という問題を課題として、前科研と同様に光学的な観察と物理的な計量をもとに、さらに発展した問題意識をもとにその研究を進めてきた。そして、文書等文献資料の料紙を観察することにより、製作年代の記述がない文書や書写年代の明示のない案文等について、その制作年代を推定できるよう、その判断基準を作ることを目的として、研究を進めてきた。

その結果、平成15年度から同17年度までの3年間の研究成果として、平成15～17年度科学研究補助金（基盤研究A）研究成果報告書『紙素材文化財（文

書・典籍・聖教・絵図)の年代推定に関する基礎的研究』を刊行した。ここでの研究成果としては、第1に、非破壊の光学的観察による紙質調査の方法を確立したことを指摘しておきたい。それは、文書料紙を透過光による顕微鏡観察を行うことによって、料紙の主原料・非繊維物質・填料・密度が識別でき、主原料の識別、製法と紙種、打紙の是非が解明できるようになったことである。これは主として元高知県紙産業技術センター技術部長大川昭典の助言指導に追うところが大きい。この研究方法は、いま同様の料紙研究を進める研究者にもそのノウハウが広まっている。第2は、主として奈良国立博物館長の湯山賢一の業績に負うのであるが、中世文書料紙の研究を、文書に隣接する典籍・経典・色紙等の料紙との関連、奈良時代からの連続性、中国・朝鮮を含む東アジアでの交流の中で考えようとする研究視角をもつに到ったことである。たとえば、江戸期の雁皮紙に白土を加えて漉く間似合紙の成立などは、中国宋代以降の竹紙との関連を想定しなければ、説明できないものである。第3には、兼ねてから上島有から批判のあった紙種の定義につて、ある程度系統的な説明ができるようになったことである。楮紙のうちの中近世の紙種である、檀紙・引合・杉原紙・強杉原・大高檀紙・奉書紙・美濃紙の成分・製法について取敢えず系統的に説明ができるようになったことである。しかし、これは今後さらに精度の高い判定方法を模索していくための叩き台にすぎない。今後、これをもとに広く関係者の議論が高まるのを期待したい。

平成15年度から同17年度までの研究に続く平成18～19年度の科学研究費補助金(基盤研究A)『紙素材文化財(文書・典籍・聖教・絵図)の年代推定に関する基礎的研究』では、東アジア文化圏における日本の紙素材文化財の料紙の位置、奈良時代から江戸時代までの通時的系譜論に重点を置いて、調査研究を進めた。本報告はその研究成果である。

まず、湯山賢一「和紙の変遷とその歴史」は、平成19年度に行った中国新疆ウイグル自治区吐魯番地区博物館、甘肅省考古学研究所、甘肅省博物館等における甘肅省縣泉置等出土の前漢及び後漢以降の紙遺物の見学・調査の知見をもとに、中国における紙改良の歴史と意義、日本への伝播・受容と奈良時代における抄紙の様相、奈良時代に形成されたその技術の中世以降への展開の見通しを論じたものである。池田寿の「文書料紙としての三桎紙」は、従来、文書料紙に桎紙が用いられるようになるのは近世にはいつてからとされていた定説に対して、すでに12世紀には文書料紙として使われた例があるとして、戦国期・室町期・南北朝期・鎌倉期・平安期と遡る形で、文書料紙として使われた桎紙を検証する。吉川聡「文書の挟み板」は、興福寺所蔵典籍文書の調査でみつけた近世の興福寺別当補任の口宣案を挟んだ板について、古代封緘木簡のように、本来文書を運送するため函の略式のものではないかとして、このような事例の

自覚的追求を提案する。

大藤 修「組織体と文書料紙—幕府代官所作成文書を事例に一」は、弘化元年(1844)に行われた江戸幕府代官所から勘定所に提出する文書料紙の改定に関する史料を基に、これらの文書に使用される料紙に、灰汁厚程村紙・厚程村紙・上西の内相紙・上西の内紙・西の内紙・八寸紙・美濃紙・大半紙・糊入半切紙・駿河半切紙のランクがあることを指摘し、このような料紙の規定は組織体の文書管理の上で不可欠なものであることを説く。さらに上級の料紙として、大高檀紙や奉書紙の使用できる身分や諸藩における染紙の使用にも言及する。本多俊彦「加賀藩主前田氏発給領知判物の料紙について」は、加賀藩前田家当主から年寄衆八家に対する領知判物の料紙について、その年代変化を実証的に考察したものである。それによると、前田家発給領知判物の料紙は、はじめ奉書紙を用いたが、やがて檀紙系統の料紙に切り替えられ、寛延年間頃より黄色の染紙を使用し始めるという。中世的料紙体系を清算する料紙の使用法が窺がえて、面白い。

大川昭典「楮・雁皮配合紙の手漉き試験」は、製紙技術研究の専門家の立場から古文書料紙を判定する基本知識を提供する。平成19年に高知県紙産業技術センターで行った楮と雁皮を配合した紙を製作実験したときの報告である。製作した料紙の烈断長や吸水度の試験結果も示す。富田正弘「中世・近世公験文書料紙の変遷—真言院後七日御修法請僧交名と東福寺公帖—」は、東寺百合文書の真言院後七日御修法請僧交名と東福寺所蔵の東福寺公帖を素材に、料紙を網羅的に測定観察し、それに基づいて中世近世の公験文書料紙の時代的変遷を考えた。その結果、12世紀～14世紀半ばが檀紙、14世紀半ば～1585年まで強杉原、1585年から江戸幕末までは大高檀紙を用いたことを確認し、上島有の説く紙種名や画期について批判を試みた。

以上、いずれも研究報告としては、意欲的な論考を得た。しかし、これらの料紙論は、ようやく研究分野として自立し始めたに過ぎない。これから、なさねばならない課題も多い。当面、私たちは、東アジアにおける日本文書の料紙の独自性とは何か、あるいは中世文書の料紙体系と近世文書の料紙体系とを繋ぐ位置にある、戦国期東国地域の文書料紙のあり方はどうであったかを解明したいと考えている。

2 研究組織

- 研究代表者 : 富田 正弘 (富山大学人文学部教授)
- 研究分担者 : 湯山 賢一 (奈良国立博物館館長)
- 研究分担者 : 三輪 嘉六 (九州国立博物館館長)
- 研究分担者 : 増田 勝彦 (昭和女子大学教授)
- 研究分担者 : 大川 昭典 (元高知県紙産業技術センター第二技術部長)
- 研究分担者 : 岡 岩太郎 (岡墨光堂社長)
- 研究分担者 : 永村 眞 (日本女子大学文学部教授)
- 研究分担者 : 綾村 宏 (奈良文化財研究所歴史研究室長)
- 研究分担者 : 藤井 譲二 (京都大学大学院文学研究科教授)
- 研究分担者 : 大藤 修 (東北大学大学院文学研究科教授)
- 研究分担者 : 水本 邦彦 (京都府立大学文学部教授)
- 海外共同研究者 : 劉 曉峰 (中国清華大学人文学院副教授)
- 海外共同研究者 : 朴 智善 (韓国龍仁大学校文化財保存学科教授)
- 研究協力者 : 保立 道久 (東京大学史料編纂所教授)
- 研究協力者 : 石上 英一 (東京大学史料編纂所教授)
- 研究協力者 : 林 譲 (東京大学史料編纂所教授)
- 研究協力者 : 東四柳史明 (金沢学院大学美術文化学部教授)
- 研究協力者 : 山本 隆志 (筑波大学大学院文学研究科教授)
- 研究協力者 : 吉川 聡 (奈良文化財研究所歴史研究室研究員)
- 研究協力者 : 池田 寿 (文化庁美術学芸課主任文化財調査官)
- 研究協力者 : 梅澤亜希子 (文化庁美術学芸課文化財調査官)
- 研究協力者 : 石川登志雄 (京都府文化財保護課文化財専門員)
- 研究協力者 : 江前 敏晴 (東京大学大学院農学生命科学研究科助教授)
- 研究協力者 : 韓 允熙 (東京大学大学院農学生命科学研究科院生)
- 研究協力者 : 藤田 励夫 (九州国立博物館保存修復室長)
- 研究協力者 : 横内 裕人 (東大寺図書館研究員)
- 研究協力者 : 角屋由美子 (米沢市上杉博物館主任学芸員)
- 研究協力者 : 地主 智彦 (京都府文化財保護課技師)

研究協力者：新見 康子（東寺宝物館学芸員）
研究協力者：高橋 修（山梨県立博物館学芸員）
研究協力者：橋本 雄（北海道大学文学部准教授）
研究協力者：本多 俊彦（高岡法科大学准教授）
研究協力者：鈴木 裕（京都国立博物館文化財修理所装演師）
研究協力者：磯崎 裕子（和紙・紙布製作者）
研究協力者：伊藤 克江（石川県加能史料編纂室）
研究協力者：竹松 幸香（前田土佐守資料館学芸員）

海外研究協力者：李向罡（中国档案局政策法规研究司副司長）
海外研究協力者：杜曉帆（ユネスコ北京弁事処項目官員）
海外研究協力者：王維坤（中国西北大学文博学院教授）
海外研究協力者：宣承慧（韓国中央博物館学芸研究士）
海外研究協力者：朴竣鎬（韓国中央博物館学芸研究士）

協力機関：京都府立総合資料館
協力機関：米沢市上杉博物館
協力機関：東大寺図書館
協力機関：東京大学史料編纂所
協力機関：東福寺
協力機関：醍醐寺
協力機関：教王護国寺
協力機関：大徳寺
協力機関：高知県紙産業技術センター
協力機関：文化庁美術学芸課
協力機関：東京国立博物館
協力機関：九州国立博物館
協力機関：国立歴史民俗博物館
協力機関：国立国文学研究館
協力機関：東京大学経済学部資料室
協力機関：京都大学中央図書館
協力機関：東北大学中央図書館
協力機関：名古屋大学附属図書館
協力機関：筑波大学中央図書館
協力機関：山形大学中央図書館
協力機関：沖縄県立博物館

- 協力機関： 沖縄県公文書館
協力機関： 神奈川県立公文書館
協力機関： 神奈川県立歴史博物館
協力機関： 栃木県立博物館
協力機関： 那覇市歴史博物館
協力機関： 石垣市八重山博物館
協力機関： 平良市総合博物館
協力機関： 久米島自然文化センター
協力機関： 渡名喜村役場
協力機関： 多良間村ふるさと民俗学習館
協力機関： 白河市歴史民俗資料館
協力機関： 彦根市彦根城博物館
協力機関： 福岡市博物館
協力機関： 名瀬市立奄美博物館
協力機関： 瀬戸内町図書館・郷土館
協力機関： 宇検村教育委員会
- 協力機関： 中国清華大学中央図書館
協力機関： 中国西北大学文博学院
協力機関： 中国第一歴史档案館
協力機関： 中国社会科学院
協力機関： 中国科学院自然科学史研究所
協力機関： 中国陝西歴史博物館
協力機関： 中国西安市文物保護考古研究所
協力機関： 中国上海博物館
協力機関： 中国新疆ウイグル自治区博物館
協力機関： 中国新疆ウイグル自治区吐魯番地区博物館
協力機関： 中国甘肅省考古学研究所
協力機関： 中国甘肅省博物館
- 協力機関： 韓国中央博物館
協力機関： 韓国韓国学中央研究院蔵書閣
協力機関： 韓国啓星紙の博物館
協力機関： 韓国誠庵古書博物館
協力機関： 韓国 Leeum (SAMSUNG MUSEUM OF ART)
協力機関： 韓国松広寺聖宝博物館

3 交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

| 年度 | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|----------|------------|-----------|------------|
| 平成 18 年度 | 6,900,000 | 2,070,000 | 8,970,000 |
| 平成 19 年度 | 5,500,000 | 1,650,000 | 7,150,000 |
| 総 計 | 12,400,000 | 3,720,000 | 16,120,000 |

4 研究発表

(1) 論文

- 湯山賢一 和紙にみる日本の文化
湯山賢一編『文化財学の課題』 2006. 4
- 湯山賢一 『撰関家旧記目録』について
『古文書研究』第66号 2006. 9
- 湯山賢一 『国家珍宝帳』の書風をめぐって
第58回『正倉院展目録』 2006. 11
- 湯山賢一・富田正弘 対談・天皇文書—その成り立ちと世界—
湯山賢一著『天皇の書』 2008. 1
- 湯山賢一 料紙論と和紙文化
『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代推定に
関する基礎的研究』（平成15～17年度研究成果報告書）
2008. 3
- 湯山賢一 筆跡論への視角
湯山賢一編『文化財と古文書学—筆跡論—』 2009. 3
- 藤井譲治 十六世紀末における日本人の地理認識の転換
紀平英作編『グローバル化時代の人文学』 2007
- 藤井譲治 大阪青山短期大学蔵
「梶又左衛門宛織田氏宿老連署状」をめぐって
『福井県文書館紀要』5号 2008
- 綾村 宏 石山寺所蔵の寺史資料について
石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書』寺誌篇第一
2006

- 大川昭典 楮・三桮・雁皮繊維の鑑別
『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代推定に
関する基礎的研究』（平成 15～17 年度研究成果報告書）
2008. 3
- 大川昭典 文書料紙の填料の観察
『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代推定に
関する基礎的研究』（平成 15～17 年度研究成果報告書）
2008. 3
- 永村 眞 醍醐寺聖教とその料紙—特に緒紙打紙に注目して—
湯山賢一編『文化財額の課題—和紙文化の継承—』 2006
- 永村 眞 消息と聖教の筆跡論—主に親鸞・蓮如の筆跡を通して—
湯山賢一編『文化財と古文書学—筆跡論—』 2009. 3
- 林 譲 古文書料紙の使用法覚書（一）—御判御教書と御内書—
『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代推定に
関する基礎的研究』（平成 15～17 年度研究成果報告書）
2008. 3
- 林 譲 大江広元とその筆跡
湯山賢一編『文化財と古文書学—筆跡論—』 2009. 3
- 池田 寿 日本の紙文化財の保存と修理
国際研修『紙の保存と修理』 2006
- 池田 寿 文化財調査における筆跡
湯山賢一編『文化財と古文書学—筆跡論—』 2009. 3
- 吉川聡・桑原文子 大宮家文書の原本調査から
『奈良文化財研究所紀要』 2007 2007
- 本多俊彦 本多政重家臣団の基礎的考察—その家臣団構成について—
『高岡法科大学紀要』 2009. 3

- 本多俊彦 「直江勝吉」に関する一考察
花ヶ前盛明監修『直江兼続の新研究』 2009.10
- 朴 竣鎬 韓国の古文書形式と礼制体式
『古文書研究』第 67 号 2009. 10
- 富田正弘 中世における紙の流通
湯山賢一編『文化財額の課題—和紙文化の継承—』 2006
- 富田正弘 琉球国発給文書と竹紙
『東京大学史料編纂所紀要』第 17 号 2007.3
- 富田正弘 紙素材文化財の料紙判定法について
『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代推定に関する基礎的研究』（平成 15～17 年度研究成果報告書）
2008. 3

(2) 学会発表

- 湯山賢一 日本における古文書料紙の変遷
東アジア古文書料紙日韓共同研究集会
於東京大学経済学部 2008.12
- 湯山賢一 日本古代の料紙（中国紙の受容と展開）
日中紙研究ワークショップ
於中国科学院自然科学史研究所 2010.3
- 大川昭典 琉球紙の素材について
沖縄の紙を考える会
公開シンポジウム「沖縄の紙資料から見えてくるもの」
於浦添市美術館 2006.9
- 大川昭典 日本前近代文化財諸料紙の復原製作
東アジア古文書料紙日韓共同研究集会
於東京大学経済学部 2008.12
- 大川昭典 典具帖紙の製作過程（高知県特産紙の紹介）
日中紙研究ワークショップ
於中国科学院自然科学史研究所 2010.3
- 江前敏晴 水によるクリーニング工程が文化財料紙の紙質に与える影響
東アジア古文書料紙日韓共同研究集会
於東京大学経済学部 2008.12
- 朴 竣鎬 韓国古文書と礼制体式
東アジア古文書料紙日韓共同研究集会
於東京大学経済学部 2008.12
- 宣 承慧 朝鮮時代における倭紙の記録について
東アジア古文書料紙日韓共同研究集会
於東京大学経済学部 2008.12

- 富田正弘 琉球国辞令書の料紙について
 沖縄の紙を考える会
 公開シンポジウム「沖縄の紙資料から見えてくるもの」
 於浦添市美術館 2006.9
- 富田正弘 日本国の古文書について（公文書の形式と料紙）
 特別講演 於中国清華大学人文学院 2007.9
- 富田正弘 「真言院後七日御修法請僧交名」の料紙について
 東寺文書研究会 於京都商工会議所 2008.8
- 富田正弘 古文書の働きと料紙
 東北中世史学会 於東北大学図書館 2010.1
- 富田正弘 武家文書と料紙
 「中近世における武士と武家の資料論的研究」研究会
 於国立歴史民俗博物館 2010.2
- 富田正弘 日本中世近世における公文書料紙の特色
 日中紙研究ワークショップ
 於中国科学院自然科学史研究所 2010.3

(3) 図 書

湯山賢一編 『文化財学の課題—和紙文化の継承—』 勉誠出版 2006

湯山賢一 『天皇の書』（『日本の美術』500号） 至文堂 2008.1

湯山賢一編 『文化財と古文書学—筆跡論—』 勉誠出版 2009.3

池田 寿 『書跡・典籍・古文書の修理』（『日本の美術』500号）
至文堂 2006

富田正弘編 『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代推定に
関する基礎的研究』（平成15～17年度研究成果報告書）
2008.3